

繪本小栗外傳

三篇

六

~ 13
3249
84



門 へ 13
號 3249
卷 8

馬

昭和十一年
一月二十四日
購

神

馬

神藏

の^ちと明^{めい}と^り朝霧^{あさぎり}陸^{りく}々^々向^{むか}ひより森^{もり}沢^{さわ}寺^{てら}の控^{ひか}行^{ぎやう}上人^{じやうじん}忽^{たち}然^{ぜん}として出^で
身^みま^ま入^りく^く目^めつ^つと^と存^{ぞん}ず^ずら^らあ^あも^も小^こ栗^りま^ま婦^ふの^の上^{じやう}人^{にん}の^の道^{だう}因^{いん}心^{しん}を^を表^{あらわ}れ^れば
人^{にん}より^{より}前^{まへ}に^に進^{しん}み^み出^で今^{いま}日^{にち}仇^{あだ}を^を討^うち^ちと^と述^のべ^べこれ^{これ}上^{じやう}人^{にん}の^の道^{だう}徳^{とく}お^およ^よる^る心^{しん}なる^{なる}こと^{こと}因^{いん}に^に
謝^{しや}され^れば^ば上^{じやう}人^{にん}も^も喜^{よろこ}び^びひ^ひ人^{にん}々の^の効^{くわい}功^{こう}を^を賞^{しょう}し^しさ^さて^て云^いふ^ふを^を思^{おも}ひ^ひ遠^{とほ}敷^しく^くあ^あら^らむ
人^{にん}各^{ひと}命^{いのち}の^のり^りて^て命^{いのち}を^を逆^{さか}す^す者^{もの}ハ^ハ亡^なび^び命^{いのち}お^お從^{したが}ふ^ふの^の果^{はた}ふ^ふ結^{むす}城^{じやう}家^け校^{がう}の^の人^{にん}々^々
東^{とう}國^{こく}に^に在^あり^りて^て吉^{きち}く^く小^こ栗^りの^の人^{にん}々^々の^の渾^{こん}東^{とう}國^{こく}に^に産^うま^まれ^れと^と年^{とし}々^々に^に在^あり^りて^て吉^{きち}く^く西^{せい}の^の
赴^{おもむ}ひ^ひく^く幸^{さい}の^のり^りそ^そを^を奈^な何^{なに}と^とい^いふ^ふ初^{はつ}め^め相^あ模^まゆ^ゆと^と妻^{つま}婦^ふ離^り散^{さん}せ^せし^しと^と美^み徳^{とく}を^を
行^いて^て再^{また}舍^すせ^せり^り再^{また}び^び來^きり^り歸^{かへ}り^り及^{およ}び^び助^{すけ}重^{ちゆう}奇^き疾^{じやく}を^を稟^{りん}照^{てう}天^{てん}股^こ眩^{けん}と^と失^うせ^せり^り
我^{われ}言^いふ^ふは^は隨^{したが}ひ^ひ又^{また}西^{せい}より^{より}病^{びやう}平^{へい}愈^{いよ}し^しま^ま婦^ふ本^{ほん}懐^{わい}を^を遂^{つひ}に^に至^{いた}る^る西^{せい}より^{より}居^いる^ること^{こと}
富^ふ田^{でん}貴^きを^を以^もつ^つて^て子^こ孫^{そん}を^を保^{たも}つ^つん^んと^と又^{また}告^つ知^ちじ^じむ^むへ^へさ^さき^きす^すの^の事^{こと}を^を告^つげ^げし^しと^と神^{かみ}皇^{みま}の^の
ま^まご^ご總^{そう}角^{かく}の^のせ^せ昔^{むかし}さ^さら^らぬ^ぬが^が谷^やの^の初^{はつ}め^め音^ね堂^{だう}と^と控^{ひか}化^けの^の翁^{おきな}を^を全^{ぜん}て^て説^{せつ}講^{かう}し^しる^るて

後藤公母父へあづかひ一色側在りこれに父結城の功を奪んとすを
 公を感ひし。小栗と名武とて親音堂を毀てては君命とてこれに
 堂を毀てて冥罰忽ち報ひて家徳を止む。親舅の命とてこれに谷
 の親音堂を再建し孝をたはれしむるべしと説きまされし小栗助を
 教まことお宮し。鎌倉殿より上速し再建せし。さて又上人前より
 我くが才西に在て軍とわれは此後西國を赴くべし。然れども某を初め腹心
 郎堂十人の東國の産なるを死を東におぼせんとし幸あらば彼親音堂の
 下や一大の坑ありと知り其より我くが警の端を切てこれを掘りて東風の土を
 なほよ均しく且ハ仏は因縁を結ぶの現當二世ともお安うらん曾まこと某は
 が許に至りし時鬼研の馬をりて害せられんとしかくて是よりく照天
 妻とすことをいふ。生後相根の危難は鬼研が助ありは生命全を

へし馬の死お望み馬の親音小栗入りを約されは彼堂の本より馬の親音
 を安んせんとす奈何あらんとすゆき遊行人大なるお安ひし其宜し非ざる
 たりし青柳をりて其堂は居しめ朝暮香華を供下りぬは是宜し非ざる
 といふ人し上人の恵を感激とてお安ひて青柳の上人の徒身とたり名を
 青柳尼と名づくる。斯く小栗結城家枝の三つを一に摸山く首級を携へて
 漢倉お還り持氏公の冥檢よとて入る其切を常し各因賞の地を賜け
 中より小栗助をば任行上人の示すはことせむはけお領は換く。さうが公の
 親音堂再建の事を請るお其よりおまじし許容あり。小栗ははびて自ら
 ち行しし道を営む。此村助をり後十一人の塾の末を切く。彼坑の中細め
 たり。是前よ説く。此坑の新田美貞主従の靈を封じりて堂を毀し
 再び世におく。小栗は後と生れお前世の因縁より今此坑は君は十一人

髪を納めたるは不思議なれがて日ありて佛堂再建の功ありて縁を
 多しりりけとるるがれが馬に記音と安置。狂行上人とて導師は
 をなむお村氏とてその通念のそ練群集。結縁をみよりのそ后に御尾
 平く此堂は居しはは仕はしりりまより小栗の謙倉殿を職とて京都
 登り將軍家の元まふ入りの一色横山とて討て首に記音堂再建のふりて
 詳小栗へ上り將軍家も山威ありて丹後國峯山を焼りなれは助を添く
 海恩を謝し。夫婦りろ共お郎黨を俱し。新恩の地より十人の郎黨に
 恩瓜分ちよへ夫婦君は道と樂し。政正しりり行り峯山は氏とてうりて
 近郷の国人小栗の徳を慕ひ丹後一國静溢は治りぬ其石小栗照天の
 同は男女の子とも教多し事いと目出な栄えり。

小栗外傳卷之十五 大尾

寒燈 小栗外傳附録

東都

絳山

述

小栗が事人口小勝多とていつとも終としてたてまつらるるに或説云小栗
 判官兼氏遠州の人なり蒲野冠者範頼の旗下なる相州ありけはとれ
 横山といの者の女兒照子姫といける小通はたれ横山これと兼氏を招き
 鬼麻毛と名つけられ悪馬に乗しめ喰殺さるるに討りしとも兼氏を双乃
 御者ありの教ともせむとて小栗の横山に憤り毒酒を進め兼氏を殺れ
 後小栗氏を獲生して後次の上人よはたれ能野本宮の湯よりて本復し
 相州より来た照子姫を還會横山と討て本領を安堵と爾より遠州天竺川に
 廻り小栗の氏を名乗りの妻といひて是安誕の所説なり又小栗實
 書あり 享保二十乙卯年國板中 世は行われと信じて鎌倉大井紙邊翁友代記

享保二十乙卯年國板中 世は行われと信じて鎌倉大井紙邊翁友代記

南朝記云小栗が子を戴り澤少に差あり何う是るを知らず常陸國誌云
小栗が系圖あり此ホの書を左母出せり。

○鎌倉大草紙卷之上応永元年癸卯春の比より常陸國の住人小栗

孫五郎平満重といふものありて謀反を起し鎌倉の比下知を脊りる間持氏と

比退治して比動座なされ結城の城をくく比出同八月二日より小栗の母を貢

らりて小栗をくくより軍兵数多城より外へ中防戦しられとも鎌倉勢ハ一色

左近將監木戸國道少と先母の大將とて吉見伊勢守上校四郎ホの荒る

かりて両方より責入り且つ比後比母を責落され小栗も行方あり比行きて

比初宮右馬次村綱も小栗も同意して比行きて比谷設河を遣り比討

けは比井下野守佐々木近江入道も比中一味の由て同八月八日討取れ八月
十六日結城より武州府中へ比陣ある。中界 今度小栗忍びて三洲へ比行り

其子小次郎入ひそり忍びて関東より比相州將現堂といふ取入り

比れを其多の強盗とも集り比所は宿を借る比主の比此等入

常洲有徳仁の福老ありと父定めて隨身の宝ありて打殺して取入り

比合と去那が比健なる家人ともあり比何せといふ一人の盗賊中酒毒入

て比殺せといふかと同じ宿の比女とも集り今候と比流せとて比戦は彼

小栗と比池をの比ゆりて比酒をとり比其夜敵多らるる比と云ふ

遊女此より小栗より比此有る比知りるや比此酒を吞

らりて比小栗とありて比此よりと云ふ比小栗香中より比酒を

さしり小栗より比家人共比比何れも比隣伏てたり小栗は比

比年より比林の有る比出る比林の内は比鹿毛なる馬を比盗りて比馬

此馬の盗人も比海道中へ比大名往來の馬を比盗りて比一のあり馬

多く人をも馬喰踏多れの盗人ども不叶く林の内まけるに置り小栗と
 足てゆきまきゆり賊室ゆく取括く彼馬も乗鞍ををり落行々小栗と
 を双の馬をゆく片附の万ふ夜沢の道場馳行上人と頼とられ上人講み
 時衆二人付く三州へ送られ彼毒酒を呑み侍家人并托女かく酔伏するを
 河水へ流し沈め材室と尋み小栗も尋みゆきゆきどもなかりし盗人ども
 を夜多散を散まらせしむれ托女の酔する非ゆりては伏されども原も酒飲
 呑まりけり水は流れ行川下り遠のり助り多し其後永享のとき小栗
 三州より身より彼遊女をよが縁中し種くのたぐをよへ盗人どもを身縁中し
 みる誅伐し多し其縁へ代く三州も居候とといふ。

鎌倉管領九代紀卷之四 永永四年五月廿四日よりを記す。

同永永四年五月廿八日小栗孫次郎満重退治のとき左馬次持氏三千五百余騎

下総國結城小栗向し去永永八年八月小栗満重所領のとき
 付てたる後ふくみを合み家人若輩を引つれく下総小栗より結城の
 減をええ兵糧とて要害を堅くし軍勢をまひらけり近郷を水際
 へ向松治給を捕が残輩その外上総下野の一揆亦はけり小栗あま
 五六百人より及り持氏大に憤り多し爰領憲実の合身の上投と郎方より一
 千余騎を以て海へ向られし寄手とて城ちりかづけ陣を取る起て城の兵
 追ちりまことりて三百余人木戸をひいて打て出りるを島津大炊助が
 軍勢二百五十騎馳合てたうひり城兵散る掛され後なる賊へひき
 ちりて寄手のいよ勝まきあておけりて城ちりかづけ人をも城中も
 兵ども同時打く出て矢射をまひ散る射合寄手百餘人のいよ
 石も打れてをみまきり荒手を入りて責かき皆城中へを引入るは

寄手悉く逆茂木の邊まで結ひ搔捕して居る。城兵は追善を以て
 首をさし出さざればとも要害きびしく城をなれり。寄手は打入へんやうもなれり。城兵は
 搔捕を境ひ矢軍にて日を送る。城中にれり。寄手は屈して穴を龍りし。城兵は
 こころ。城の内のまゝに似たり。木戸を堅める。旧井五郎はひたはる。あまのり
 寄手の結りけて物喧し。夜打り。肝はさきせんと志同。城軍
 をいざらひ廿七人ある。夜西風をびり。城中より忍び出く。香河は江亮の
 陣をよ火をさし。関はけり。いづれをさや。城中より打て出らる。とて寄手は
 立上り下り返り。馬よ物の具よとひり。火の子飛散。陣をく。小銃
 つた。いづれ風吹きたれ。煙はむせ。火は惑ひ。打消さんとし。防人
 後。敵の及少をもち。味方の軍兵をも弁入とあたる。敵と。同土
 討をぞいじ。は旧井五郎もさ。さ。小勢。さ。の。ゆ。ゆ。入。て。跡。を。き。切。り。を

とて陣を積置し。兵糧少く。あ。あ。城へ入り。よ。は。寄。手。は。こ。し。よ。お
 懲り。責。口。を。ら。げ。陣。を。ま。び。く。か。ま。入。り。用。を。と。し。け。る。河。を。く。後。を。割
 免。ま。げ。様。を。さ。る。う。と。美。の。人。か。ら。り。け。り。左。る。氏。氏。の。ひ。か。さ。ら。ぬ
 る。約。千。結。お。は。ぬ。寄。手。合。武。老。の。あ。り。の。居。る。小。城。を。責。あ。ぐ。ま。手。月。を。辛。味
 不。ぞ。ん。ま。ま。う。那。言。な。傳。射。給。を。の。傳。射。七。義。成。赤。内。く。小。栗。よ。同。ま。し。桃。井
 下。野。入。道。佐。木。陽。入。道。も。一。味。手。刀。と。さ。せ。也。これ。ら。り。後。結。成。い。さ。ら
 ぬ。した。大。る。た。と。持。氏。ま。ま。を。向。ひ。一。粒。よ。責。亡。を。入。と。て。強。會。を。打。立。結。陣
 の。城。を。は。く。と。却。しく。同。射。の。國。を。修。り。滑。つ。且。て。甘。あ。り。城。小。驛。へ。入。と。す。り。起。を。
 城。兵。矢。種。を。惜。ま。と。散。り。小。射。出。大。木。五。六。十。を。切。り。落。り。た。れ。ば。あ。ま。り。先。陣
 完。戸。又。四。郎。う。五。百。余。猪。痛。手。の。手。負。ま。り。ま。り。城。中。二。百。餘。人。木。戸。を。圍。死
 突。て。出。つ。四。角。八。方。を。追。ま。り。し。ら。村。を。ふ。ら。り。且。て。大。將。左。る。改。展。の。旗。本。あ

なごれうは荒手八百金結周と入勢り二百餘人中母のみは討らる戦ふ
城兵残さるる討て東攻さるる處ゆ寄すられ目も越木也
引中づり逆茂木をうち倒して込けし城兵をせらるる入られ押統て
責入小石火をかけし城兵火はほと防くべらやうもなす我先中も
これハ大石小栗孫次郎と家の子竹之恵子息小次郎を助け味を
つが身ハ腹うけ切く煙の中お臥さる。下畧

南朝記 前二書と大同小異多し要を備く出さ

應永二十九年常陸國人小栗孫五郎平満重持氏の命をせむれは故
持氏上投三郎と方小山左馬介ふ命を討めしは十月廿二日小栗城
合戦と同年五月九日徳倉の持氏小栗退治と下総国結陣の
陣といふ。同年八月二日小栗落陣と満重及び宇都文持然らるはとて

落ゆきしと塩谷後河原退はけらる取るあり

鎌倉志より大草紙を引く小栗がことを云へる世人の知る処

相州夜沢の遊行寺の院中長生院といふ小栗并家人の墓ありその院
より小栗畧縁記を写し前書と異なりし雖墳墓より知れ縁記かれば敢て撰

ゆわあはまは左よ出しく参考の一助とを因は遊行寺の圖説をもやね

藤澤山無量光院清淨光寺 時宗本山

本尊阿弥陀佛 座像長四尺慈覺大師の作版権開祖一遍上人房四代目

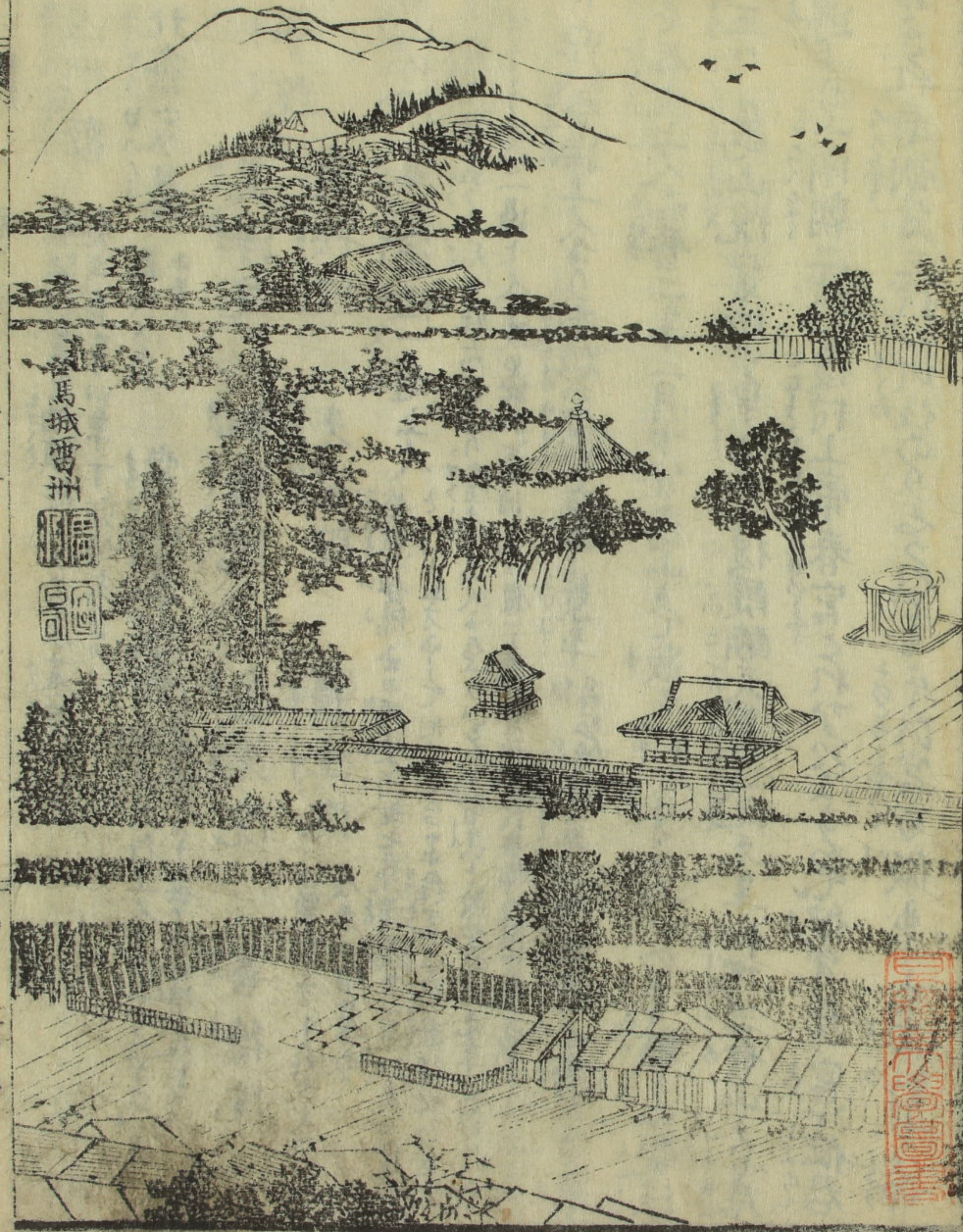
観音堂 本堂の左よあり正統寺を安置と長き尺五寸智證大師の作
當山四十二世南門大僧正西国三十三所の土を以て本堂に下り埋て巡礼を

常行堂 本堂の側よあり 鐘堂 南の門内よあり

日供堂 本堂の側よあり 經藏 観音堂の側よあり

方丈 日供堂の側よあり 富士見亭 方丈の上方よあり額あり清音と書と

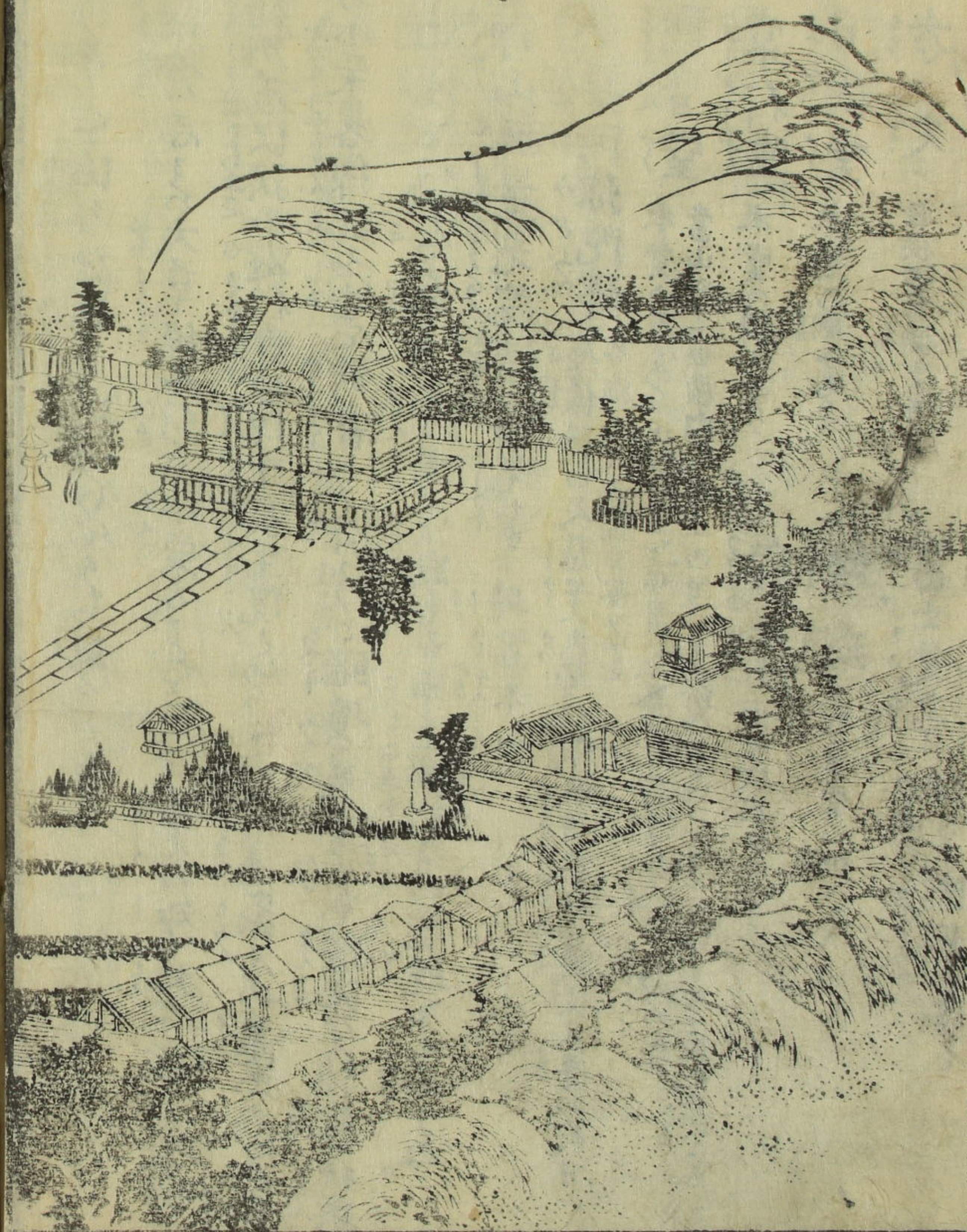
光寺之圖



馬城曹州



藤澤山無量院清光寺



卷之十五

三門額 藤沢山ときと勅額従二位兼承基時卿等

北条家墓 南門の内 當山累世墓 同基行上人より五十三世まで并
藤沢山三十三世までの墳墓あり。

子院 真浄院 栖徳院 真光院 善徳院

貞松院 光岳院 長生院 小栗照手氏外十人の
及東の墳墓あり

當山の開基の宗祖一遍上人 俗姓伊藤氏の須主河社七条道成の二男初名松重元
とより隨縁坊と号せし後土門に入り聖達上人より名を智光と改め建治元年慈覺持現
の示現より名を一遍上人と改め徳永と回国正應二年八月三日播磨兵庫の府におと寂と年五十八

より四代香海上人より奉持の侍世五帝景平 法名依紀立の資助ありて高寺の草
創と香海上人嘉曆二年二月十日當山にて寂と年六十三才十一代の寺職と親法

院王の 龜山院才四の皇子の 後醍醐天皇延元元年和訓吉野山より居
を遷すのふ南朝二代 後村上帝春宮これかたよりて彼才四の宮を徳君

とたこれ南朝三代の即位ありたれどもその宮方微ちく吉野十八御

尊氏の兵威小恐れ宮方小隠れと遂に才四は行八世の源頼朝上人の

子と旅する。此府の年 延文五年より藤沢山に御在應安二年に攝津國

兵庫の津さの光さの住職永和三年小羽洲山形光明さの止湯至徳二年

は甲府一蓮さの御止職嘉慶元年二月廿六日より海内行行しるひ時宗十

二代目を相續はしく。是親上人と號を總國修行の才十四年なり應永三年

の秋上洛す。百一代の帝。後小松院の朝小内親王の左に着せ

ある南朝の山裔流なれ。後醍醐天皇の宸影。并御宸翰硯硯小せ宮

隨心院より行行する親王の授ふ。此縁由ありて行行十三世上人より

己後へ代々倫吉頂戴奉内。格式小御所埋圍の内之を自ら。龍顔を

拜しをなれり。是親法親王泰永四年の夏回国修行の。後小松院は連

敷聞足利三代の將軍義満に。勅命ありて當代行行上人の南朝即位の

皇子くるふよらて順國のりき等困がらに國のりき護人なるに於て止宿まはるの
 たり。賄賂食忘念いふも意ざらに古官領職斯波光緒つ佐と我るを
 ち護人へ仰せらる。又足利氏代に軍義持より。扨行十四世太宮上人回國の
 教を賜ふ。それより代々の方家より此教をとりまはる。

○小栗堂

長生院より東まき町まわりの子院の中にて長生院といふ小栗満幸像
 三十八地を著す意公の作といふ照姫の守佛といふ婚魔王の像小井首王の
 作。又傍に小栗拾人の待臣の古墳あり。

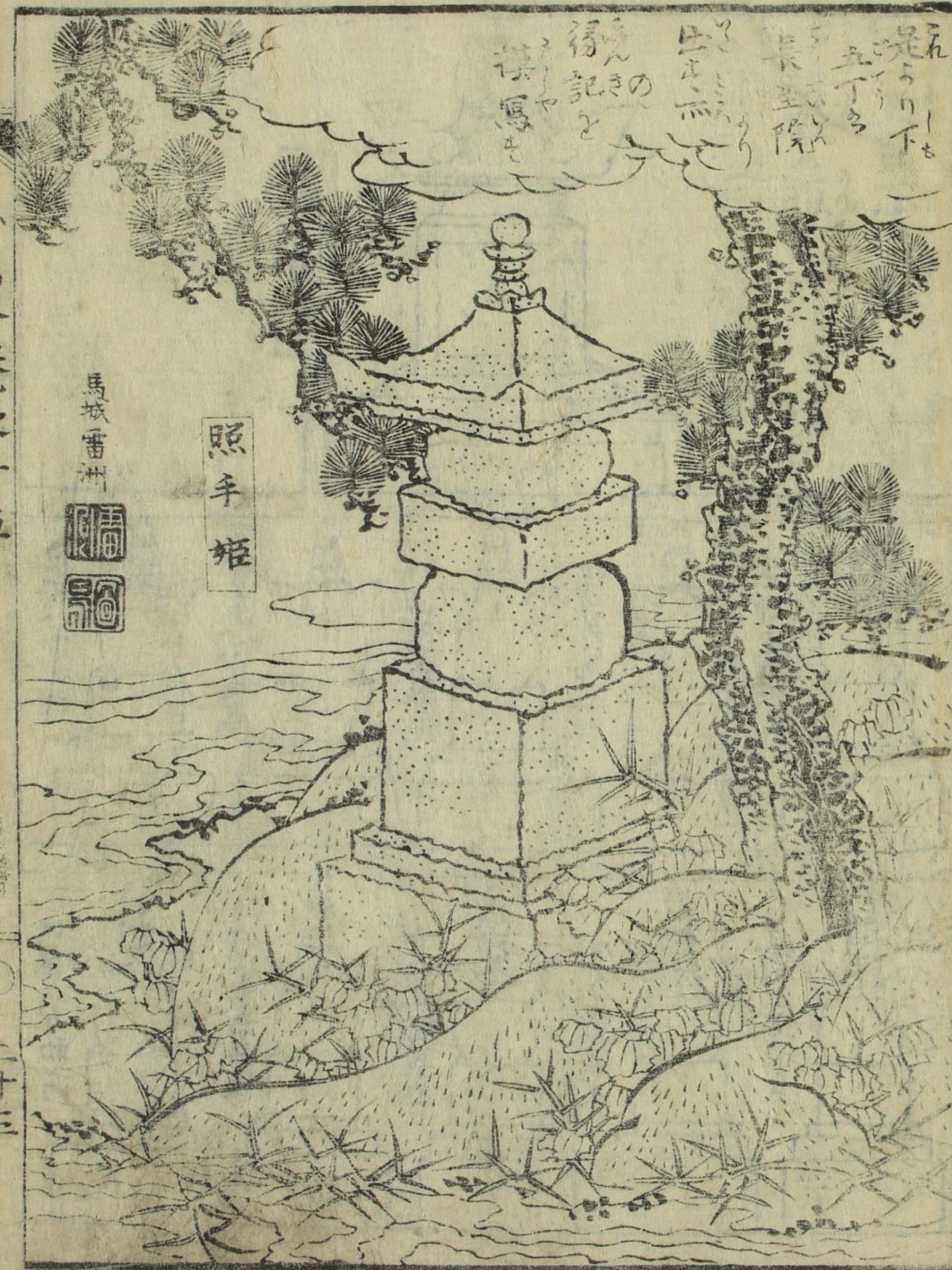
○什宝 鬼鹿毛嚙

宗寧通宝古銭

照姫所

天狗瓜 古鏡一面

此長生院より鬼鹿毛馬の図古鏡の図小栗縁記をいせり。此縁記の文字
 疑わしむるあれと私の杜撰より正しからず。其傳より写しとたしむる。



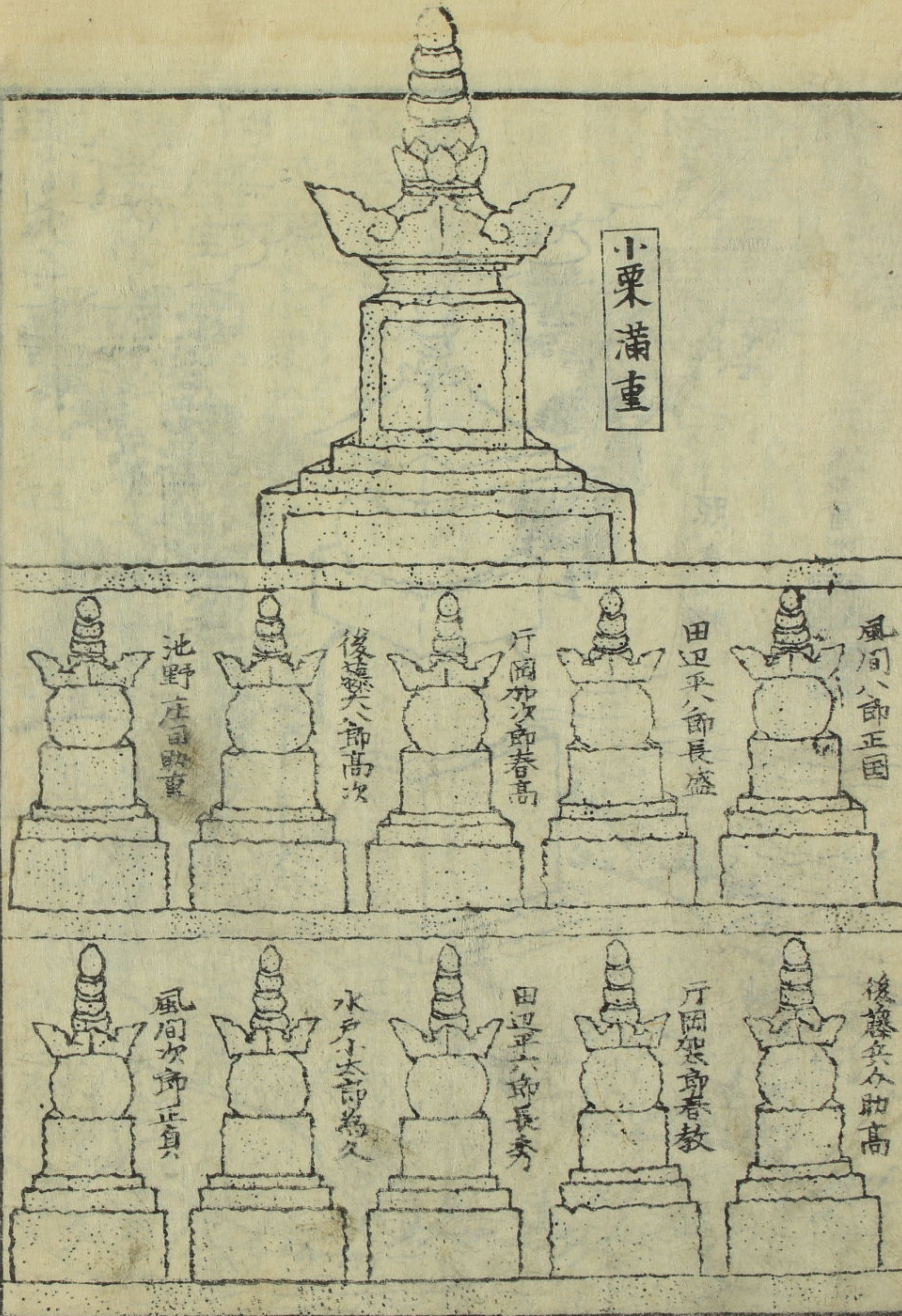
照手姫

馬城雷州



馬城雷州

小栗満重



久遠より 桓仁王百一代小松院の御宇 奥の細道陸奥小栗城を宇孫五郎判官
 満重 桓武天皇の後胤にして武臣一知勇を依の士なり 應永
 の初同士満重は依て謀叛の父へ満重を遣し官領村氏朝臣征討して一色
 左近将監木戸内近公 駿河を討つて教月戦ありとも 後重を堅固にして一族亦
 勇を揮ふも容易なるが加勢にて古見伊豫守上牧四郎近加りたる
 い急勞戦とていとも 孫五郎重及びね満重を養ひ 密に城内を忍び出
 三河國を流るる折も相州の武士横山大膳の末末馬場存之太といふ者
 神詣の爲り満重と休し横山の鼓を誘ひて 大膳といふ者の強帯
 志を謀るる 山城を業と 榮耀を誇り 女を奪め 中一 照耀と
 いふ 妓女あり 俗に 父の北面の浪士や 一子ありて 教月 親考 入新
 設し 子に父母亡て 後故ありて 横山に 住居し 満重 運道 のらち 相

よんで階老の托を結びしを以て月日もまねず大膳の何とて判官を
 幕下に附んと文弁の人を選び行く謀るといふも漢字は智中と譯す
 ありざりし其比大膳一疋の悪馬在りたひふ人と喰ふ由を鬼麻毛と名
 づけて後園の樹下に收系ぎて満重勇猛にして従つたれを悟り彼馬は
 害させんと後重は謂く曰仁社此馬を食ばば則ち死すと有りしが小栗
 重耳馬上の達人なり以て牽よせゆと打まごり堅横序破急基盤の上
 へて自在なる其術を人々譽め感公せり横山の案相違し家もよふ合
 美女妓女を海舟系竹歌弄の鳥と傳へ酒宴おとせ鴆毒を以て害せんと
 横山は従違て追め吞せられたる各行る五辨痛傷して忽ち氣を失はゆべ以
 るまろ人れ悉く醉死せり横山は従大は飲毒し次は杖毒を吞み死を
 上野が系小捨よける下時夜以上人其歌の爰は青夜の官人ありて曰我は

此字不正

園王の使と一ツの虫札を上人へ呈し其書と披きんふ大日本常陸國小栗満重
 士拾人とも鴆毒の爲に害せられ士拾人の宿世の酬因に満重福の報業なるに依て
 獲生せしむと能野の温泉に浴せし速平復とてこの越なり爰は是れ毒の
 通と云へと不承言耳又へ拾人の屍を花弁り波手を扶持して海に車を造り
 徇札を舟其文曰此病人送能野本宮湯若有人暫助引之者可勝供養於
 僧功德矣夫より地名を車田引路と云く此車は舟本宮湯の字ありあり入湯
 の間に髪を束ねて結び多し一本復あつて其案を車塚の下へ捨られしこれ
 より稲はすて小栗判官不詳の稲といふあり爰は照姫を常と親と世と通へと
 穴糶は淫家を逃去り武州今沢六浦小赴し追手の者有りて逃ししは此の
 所噴し夜類を剥きりて付女が淵に投入れて去りぬ娘類のや就喜を念とるふ

不思議なる哉六浦川村千光寺の観音光りを況し姫が驚死を救ひし事
 此善像を照るの姫の御影なり
 又云う所の千光寺の御影なり
 其此世の御影一人の漢文あり此奇蹟を以て感歎し姫を
 宅中流しし事ひよ小妻嬖妬はく姫の美女なる事と傍を松枝を集め茶を殺んと
 欲を姫一分を観音と念せしむる忽ち風紀を煙花さぬ小嵐にて姫を身で除くこれ
 偏に大士の靈驗と云ふ思ひし妻怒り所を松枝を江中へ投ぐる事同流流たぬ
 事も漂流し根を生じて繁茂せり
 今世の御影照る事妻止むと云ふ事商人を破し
 多る後へ流別大破加の宿まて人のそなたに互愛艱難の時にお満重の本復そ三羽の
 下り所縁を頼り京都へ訪ぐる事奉有のこみより依る官に任せられ本願を安ん
 ずる常例は詠く序の横山が館を尋ね大膳をえりお先毒酒を以て室は世
 満重をゆめれいける愧變多くと既にお逃去んと云ふ事満重は後手早く顔賊を捉
 捕共刑し然面友沢山へ入る事おののけれ上人の恩恩を謝し間寛堂におして

報恩の爲自病まき本復の像を刻し法會を行ひ再活の徳を拜し奉國の
 事小栗お住せりおて照姫濃洲にお在りし事則呼下し謝縁を多る満重
 その後一向三宝を皈し星霜を待て應永三十二年三月十六日病死し法名
 重嚴院満阿弥陀佛と稱し舎弟助重領を継ぎ鎌倉お悉し藤沢山へ入
 り父并郎を拾人の碑を八徳池の辺りに建退孝謝恩の供養を間寛堂に於
 懇小堂をのみあり照姫の本より鐵土を散るの志承りし事預て薙髮受戒して
 長生比丘尼と号し間寛堂の傍に地蔵の像と小栗満重の像を安置し
 朝の光を摘み夕へおの燈をかかげ専ら念佛念ふ事永享十二年十月十四日
 西向の瑞座合掌して逝し長生院喜佛房と号し跡長生院と稱し今
 藤沢山の一方と成りぬ

相州藤澤山内 長生院

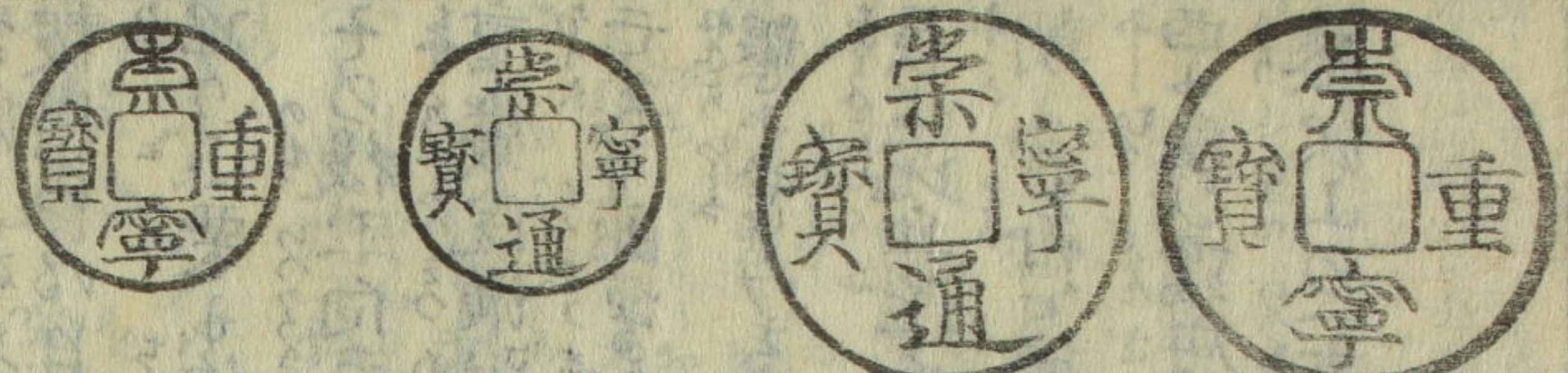
法國ヶ谷
 照姫の巻
 小栗墓
 十騎塚
 鬼鹿毛鬃
 八徳水
 横山屋鋪
 珍寶臺
 上野原
 引地原
 車田町

上小書を十一名を
 長生院の圖上小ありしと
 紙中挾が故ふくふ出〜奴



八陵の鏡又名唐鏡

照天姫所持の鏡あり



此錢は宋の徽宗帝の崇寧元年
 鑄まり此の文に上耳まで
 七百十三年の
 多かり大錢
 一と多く小錢
 十小換はるし
 昔照手は
 長生院に
 此錢あり

小栗横山ヶ邸ふくと乗し
 鬼鹿毛之圖



馬城雷洲



馬城雷洲



相州遊行寺
寺内
長生院

常陸國志云小栗氏地在真壁初國人相傳小栗判官兼
 家宅也按小栗氏は重成歟說見左兒女子所傳小栗
 說經書曰小栗判官兼家常陸國人也聞相模國人橫
 山氏有美女名曰照手國色有文遠寄書以挑女喜而
 許配兼家直趣橫山家乞為婚橫山惡其強暴鳩殺之
 兼家死入冥府見閻羅王王察其無罪放還兼家蘇生
 云荒唐可笑考旧記小栗氏世系東鑑湘山皇終集以鎌倉筆中行事記等各所載也
 陸國大椽多氣繁幹第四男曰重義食邑真壁郡小栗
 地為小栗氏重義子曰重成號十郎筮仕源賴朝治義
 四年源賴朝討佐竹飯路趣重成宅重成饗賴朝壽永

祖恐檀杖
金髮當作
金華髮
南廷百
三子解

九年信太義廣有自立之志誘引諸國武士常陸國武
士多屬義廣重成孤立不服而賴朝遣結城小山徒攻
之重成有戰功三年賴朝遣二弟滅木曾義仲於京師
攻平宗盛於南海西海重成皆有戰功文治五年賴朝
自將伐奥州重成先登泰衡敗北賴朝入平泉館是即
泰衡宅也館屋罹災為焦土唯一庫存賴朝遺葛西
清重小栗重成開庫点檢有水沈紫粗厨司藏牛犀角
象牙笛水牛角紺瑠璃笏金鳥玉幡金髮蜀江錦帷金
鶴銀瑠璃燈籠南廷百錦繡綾羅等種々珍宝賴朝以
錦帷牙笛賜清重以玉幡華髮賜重成為潤色氏寺而

乞此二物云建久四年五月與伊佐為宗受賴朝旨修
造鹿島神社經歲月功不就賴朝怒命八田知家役功
七月發狂疾自称神託多吐謔言初重成以玉幡金華
髮為氏寺飾自後每夜夢有山臥僧數輩來聚重成枕
頭乞玉幡重成心甚惡之終發狂疾重成從者馳馭告
梶原景時入告賴朝賴朝命馬場資幹代重成監修造
事重成子曰重信號二郎建仁三年北条義時為宗朝
命擊殺畠山重保於鶴岡麓重信先登覽元五年夏北
条時賴滅三浦泰村常陸國武士関政泰救三浦氏不
克自死於法華堂時賴命重信襲関政泰宅關氏家臣

神藏
日記

與重信戰関氏敗走重信縱火焚関氏館重信子曰朝
重號弥二郎朝重後食邑於小栗地應永年中足利滿
隆逐持氏小栗氏為滿隆黨及持氏就位常例小栗氏
族皆戰死遂絶後嗣云云

右中史と処の他小栗が傳と誌との東鑑湘山星移集澁念年中行事
記本の書あり大同小異ゆく此亦再記をもくしるる是を漏し他
書小栗が傳を載るのありや否世俗云傳小栗判官がるの右ふ出せ
諸史の説を混じ合して云々也

小栗外傳附録 畢

和漢書籍賣捌處
西洋

大阪心齋橋博勞町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

